

## 女子尿道扁平上皮癌に対し集学的治療を施行した1例

中神 宏章 藤澤 友美 早川 将平

静岡赤十字病院 泌尿器科

**要旨**：女子尿道扁平上皮癌に対し集学的治療を行い良好な経過を得た1例を報告する。症例は81歳女性。不正性器出血を主訴に受診した。外尿道口から突出する乳頭状腫瘍を認め、尿道擦過細胞診は陽性であった。尿道癌cT2N0M0の診断で尿道腫瘍切除術を施行した。病理組織学的診断は扁平上皮癌であり、病理病期はT1、切除断端は陰性であった。術後5ヶ月でPositron emission tomography- Computed tomography (PET-CT)にて両側鼠径リンパ節転移が出現した。テガフル・ウラシル配合剤 (UFT) 内服および放射線外照射療法60Gy/30Frを施行したところ、両側鼠径リンパ節転移は縮小し、化学放射線療法開始後4ヶ月でComplete response (CR) となった。UFT内服を継続し化学放射線療法開始後10ヶ月経過した現在もCRを維持している。

**Key words**：女子尿道扁平上皮癌，化学放射線療法，集学的治療

### I. 緒言

原発性尿道癌は女性の悪性腫瘍の0.01~0.02%を占める稀な疾患であり進行例では予後不良とされている<sup>1)</sup>。今回われわれは腫瘍摘除術を施行した後、鼠径部リンパ節転移に対して化学療法と放射線療法を併用し良好な治療効果を得た症例を経験したので報告する。

### II. 症例

【患者】81歳，女性

【主訴】不正性器出血

【既往歴】2型糖尿病，大腸炎

【現病歴】2019年1月，主訴より婦人科を受診。視診にて外尿道口より腫瘤性病変の突出を認め当科に紹介となった (図1)。

【現症】身長154cm，体重62kg，血圧181/98mmHg，脈拍84回/分，体温36.9℃，SpO<sub>2</sub>96% (room air)，外尿道口より突出する1cm大の乳頭状腫瘍を認めた。

【検査所見】血算，生化学検査ともに異常値を認めなかった。血清腫瘍マーカーはSCC1.1ng/mL (正常1.5ng/mL以下) と正常値であった。擦過細胞診：陽性，扁平上皮癌。

【画像所見】骨盤部Magnetic Resonance Imaging (MRI)にて尿道に腫瘤を認めたが，膈前壁への浸潤は認めなかった (図2)。胸腹部CTにてリンパ節転移や遠隔転移は認めなかった。膀胱鏡検査では尿道口側1~9時方向に乳頭状腫瘍を認め，外尿道括約筋より膀胱側には病変を認めなかった。

【経過】各種画像検査，細胞診の結果より尿道癌cT2N0M0と診断したが患者への侵襲を考慮し，局所手術を選択した。手術は会陰より外尿道口から尿道括約筋遠位側まで腫瘍を含めて尿道を切除



図1 外尿道口から突出する乳頭状腫瘍

(図3) し、切除断端を縫縮して再建した。病理組織学的診断は扁平上皮癌であり、切除断端は陰性

であり病理病期はT1であった(図4,5)。術後補助療法は行わず経過観察としたが、術後5ヶ月の



図2 MRI骨盤部矢状断 T2強調画像  
外尿道口の付近に径14×15×20mm大の腫瘍を認める



図3 術中尿道腫瘍局所摘除後

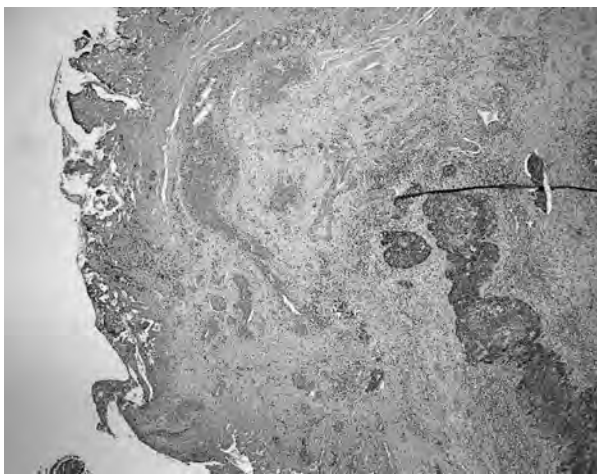


図4 摘出標本の病理組織HE染色

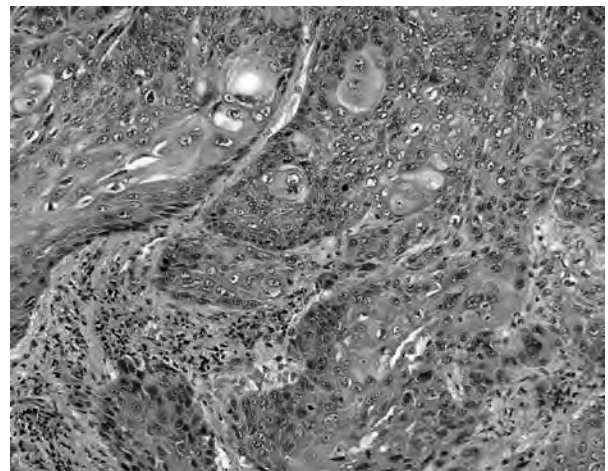


図5 摘出標本の病理組織HE染色

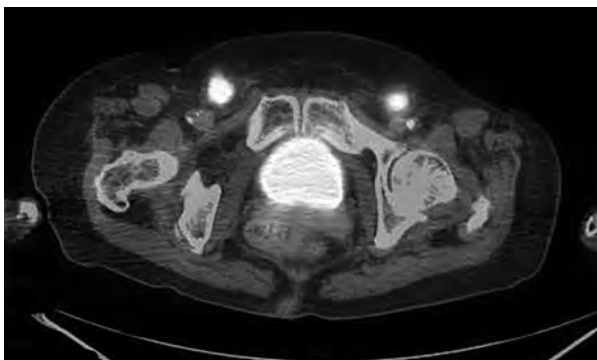


図6 PET-CT画像 両側鼠径リンパ節の腫大を認める

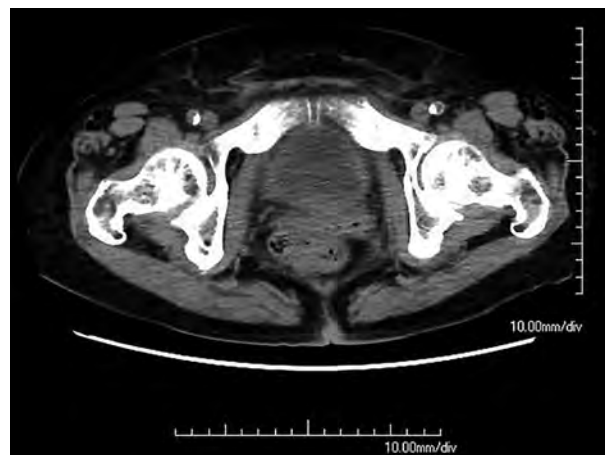


図7 放射線外照射終了後CT リンパ節腫大の消失認める。

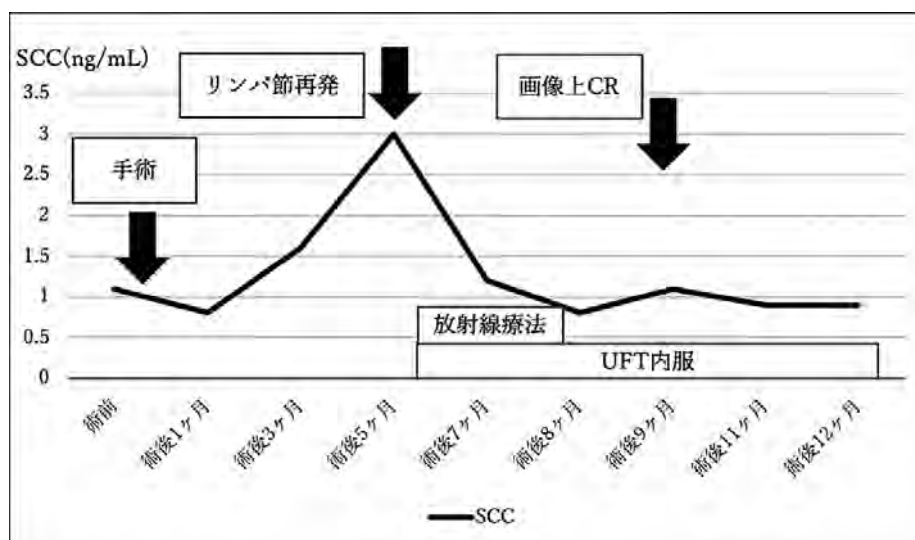


図8 治療経過

時点でSCC3.0ng/mLと上昇を認め、PET-CTを施行したところ、両側鼠径リンパ節に転移を認めた(図6)。術後療法として、UFT内服および放射線外照射療法を施行した。UFTの投与量は300mg/dayとし、放射線外照射線量は60Gy/30回をリンパ節に対して施行した。両側鼠径リンパ節転移は縮小し化学放射線療法開始後4ヶ月でCRとなった(図7)。この時SCCは0.8ng/mLと正常値まで低下していた。UFTの内服を継続し化学放射線療法開始後10ヶ月経過した現在もCRを維持している(図8)。

### Ⅲ. 考 察

原発性尿道癌は女性の悪性腫瘍の0.01~0.02%占める稀な疾患である<sup>1)</sup>。尿道癌の病理組織型は、扁平上皮癌、尿路上皮癌、腺癌など多様な組織型が存在し、本症例の扁平上皮癌の頻度が高く、33%~46%と報告されている<sup>1, 2)</sup>。NCCNのガイドライン2019年版ではT1以下の症例では局所療法、T2では化学放射線療法もしくは尿道摘除+膀胱摘除術が推奨されている<sup>3)</sup>。今回の症例では術前精査でT2が予想されたが、尿道摘除+膀胱摘除は患者への侵襲から困難が予想され、肉眼的に前部尿道に位置する腫瘍で摘除可能と判断し尿道腫瘍摘除術を選択した。術後病理診断はT1で断端は陰性であったが、早期にリンパ節転移を認めた。再

発に準じて化学放射線療法を行った。本邦ではT2以上の女子尿道扁平上皮癌での詳細なレジメンの記載があった化学放射線療法の症例を今中ら<sup>4)</sup>がまとめており、6例全例でプラチナ製剤が用いられていた。全例で10ヶ月以上の再発なく、良好な局所コントロールが得られていた<sup>4~8)</sup>。うち2例、Haraら<sup>5)</sup>の報告ではFluorouracil (5-FU)とCisplatin併用での化学療法が行われていた。また、Krishnaら<sup>9)</sup>はStageⅢBの尿道扁平上皮癌に対してパクリタキセル、イホスファミド、シスプラチン(TIP)療法を行なった後に、5-FU療法と放射線外照射療法にて、CRを得た報告をしている。今回の症例では、術後の再発に対して、静脈注射での化学療法の負担を考慮しUFTによる内服療法と放射線外照射療法を選択したが、良好な経過が得られた。5-FUとUFTは投与経路が異なるが作用機序を同じくし、点滴加療での負担を考慮すれば本治療も十分に選択肢に上がるものと考えられる。諸家の報告例では局所の治療が奏効した後も遠隔転移を来たす報告もあり、今後も定期的な画像検査、SCC測定による注意深い経過観察が必要と思われる。

### Ⅳ. 結 語

女子尿道扁平上皮癌に対して、手術療法、化学療法、放射線療法を組み合わせ集学的治療で良

好な経過を得た1例を経験した。

## 文 献

- 1) Swartz MA, Porter MP, Lin DW, et al. Incidence of primary urethral carcinoma in the United States. *Urology* 2006 ; 68 : 1164-8.
- 2) 山田雄太, 高橋淳子, 金村三樹郎ほか. 原発性女子尿道癌の4例. *日泌会誌* 2012 ; 103 : 675-680.
- 3) 日本泌尿器科学会監訳 : NCCN膀胱癌診療ガイドラインVer4. 2019
- 4) 今中岳洋, 井上均, 大島純平ほか. 化学放射線療法が奏効した進行性女子尿道扁平上皮癌の1例. *泌外科* 2019 ; 32 : 487-91.
- 5) Hara I, Hikosaka S, Eto H, et al. Successful treatment for squamous cell carcinoma of the female urethra with combined radio- and chemotherapy. *Int J Urol* 2004 ; 11 : 678-82.
- 6) 牧野雄樹, 松岡崇志, 北悠希ほか. 原発性女子尿道癌の2例. *倉敷中病年報* 2010 ; 72 : 87-91.
- 7) 加藤秀一, 柳瀬雅裕, 久末伸一ほか. 原発性女子尿道癌の2例. *泌外* 2007 ; 20 : 687-9.
- 8) 立花貴史, 松本和将, 名木渉人ほか. 化学放射線療法が奏功した尿道癌の2例 80歳を超える女性症例の経験. *泌紀* 2016 ; 62 : 367-71.
- 9) Suthar KH, Kesireddy M, Sides M, et al. Neoadjuvant Radiation with Concurrent 5-FU Resulting in Complete Pathologic Response in Stage III B Squamous Cell Carcinoma of the Urethra. *Case Reports in Oncological Medicine* 2020 ; doi : 10.1155/2020/7948538

## Clinical Complete Response After Chemoradiation of a Female Squamous Cell Carcinoma of Urethra: a Case Report

Hiroaki Nakagami, Tomomi Fujisawa, Shohei Hayakawa

Department of Urology, Japanese Red Cross Shizuoka Hospital

**Abstract** : We report a case of female squamous cell carcinoma of urethra with multidisciplinary treatments and a favorable course. The case was an 81-year-old woman presented with perineal bleeding. Inspection showed a locally tumor in the urethra. Urine scraping cytology was positive. Urethral tumor resection was performed with the diagnosis of urethral cancer cT2N0M0. Histopathological diagnosis was squamous cell carcinoma and the surgical margin was negative. PET-CT 5 months after surgery, bilateral inguinal lymphnode metastasis appeared in the patient. After oral administration of Tegafur uracil and external irradiation 60 Gy / 30Fr, bilateral inguinal lymphnode metastasis decreased and became CR 4 months after the chemoradiotherapy. It continued and the CR is still maintained 10 months after the chemoradiotherapy.

**Key words** : Female urethral cancer. Chemoradiotherapy. intensive combined therapy.